

水稻の生育状況と当面の対策

基本技術を励行して消費者に「おいしいお米」を届けよう！

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiku/index.html>

臨 時 報
千葉県農林水産部
平成29年11月16日

来年に向けた病害虫防除対策を進めましょう

[これからの管理のポイント]

■ イネばか苗病

ばか苗病は種子伝染しますので、種子更新を必ず実施し、適切に種子消毒しましょう。
ばか苗病菌の胞子は少なくとも200m程度飛散し、翌年の種子となる開花期の籾に感染します。そのため、ばか苗病の発生は、水稻種子生産に大きな影響を与えます。

優良種子の生産のため、県下全域での**ばか苗病対策に御協力をお願いします。**

- (1) ばか苗病発生ほ場は秋耕し、稲株を土中に埋没して、菌密度を下げましょう。
- (2) ばか苗病の発生ほ場から収穫した稲わら、米ヌカ、もみ殻等は「ばか苗病菌」が存在している可能性が高いです。浸種や催芽、は種をする作業場や機具機材を良く清掃して、ばか苗病菌の密度を下げ、感染リスクを下げましょう。
- (3) 次ページのイネばか苗病予防チェックシートを使って確認をしましょう。

■ スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

本年も、海匝地域・山武地域・長生地域など九十九里沿岸の地域を中心にスクミリンゴガイの被害が多発しました。昨年が暖冬であったため、越冬した貝が多かったことが原因と考えられます。

スクミリンゴガイは、用排水路でも越冬し、ほ場への侵入源となることから、用排水路の清掃等、地区全体で防除を実施すると防除効果が高まります。

収穫直後など土が硬い時にロータリーで耕うんを行うと貝の破碎効果が高まります。また、厳寒期は、田を乾かしロータリーで耕うんすることで、越冬中の貝を破壊すると同時に、寒気にさらすことで防除効果が高まります。耕うんは走行速度を遅くし、回転数を早くします。スクミリンゴガイは土中の浅いところで越冬しているため、浅く細かく数回耕すと、貝の破碎効果が高まります。

更に詳しい防除法についてはスクミリンゴガイ被害防止対策（安全農業推進課）を御覧ください。（<https://www.pref.chiba.lg.jp/annou/nouyaku/applesnail.html>）

飼料用米の取り組みのお知らせ

30年産以降は、国による「米の生産数量目標」の配分は廃止されますが、米の需要量は減少傾向にあるため、引き続き米の生産調整が必要です。

- ・食生活の変化や高齢化等により、米の需要量は全国で毎年約8万トン減少しています。
- ・生産量が需要量を上回り在庫量が増えると、米価の下落を招きます。
- ・米価安定のためには、30年以降も飼料用米等の取組が必要です。
- ・「生産数量目標」に代わり、県農業再生協議会から地域農業再生協議会経由で「生産目安」が提示されます。

過去に掲載した内容、水稻栽培の基本情報、病害虫の発生予察情報等については、千葉県ホームページ「生育情報」を御覧ください。（<https://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiku/>）

イネばか苗病 予防チェックシート

ばか苗病の撲滅は、健全な種子を使った品質の安定した米生産のために緊急かつ必要不可欠な取組です。皆さんも今一度ばか苗病対策について確認をお願いします。

- 浸種～育苗を使う場所やその周辺を十分清掃し、伝染源となる稲ワラ、籾殻、米ぬか、粉塵等を除去している。
- 消毒前と消毒後の種籾を、同じパレットやシート等に置いていない。
- 温湯消毒済みの種子は、清潔で過湿にならない場所で保管している。
- 浸種、催芽で使用する機器並びに容器は、品種や消毒方法が変わるごとに十分洗浄している。
- 温湯消毒や微生物農薬による種子消毒は、それぞれ単用では効果が劣るため、これらを組み合わせた体系的な処理を行っている。
- 浸漬による種子消毒時には薬剤の効果を安定させるため水温 10℃以上を確保している。
- 浸種時の水温は（ばか苗病菌の増殖を抑えるため）、10℃を目標に管理している。
- 浸種の際の水交換は種子に付いた薬剤が流れ落ちないように静かに交換している。
- 一度使用した消毒液は処分し、使いまわしはしていない。
- 浸漬後は、籾の表面が白くなるまで陰干しをしている。
- 育苗箱内の発病株（ばか苗）は、見つけ次第直ちに抜き取り、育苗場所から離れたところに埋設するか焼却している。

前年度にばか苗病の発生があった方は、以下の点も確認をお願いします。

- 育苗箱・シートをケミクロンGまたはイチバンで消毒している。
- 消毒や浸種で使用した水槽の清掃・消毒を十分に行っている。
- 自家採種の種籾を使用していない。